札幌大学総合論叢　第21号（2006年3月）

〈論文〉

研究覺書（I）
——行き行きてたふれ伏すとも萩の原——

清　水　　隆

1998年3月に發行された新設文化學部の研究紀要第一号「比較文化論叢」の305頁に，「研究ノオト——『抱負』も交えて」と題した小論を載せたのだが，今回の「研究覺書」を認めるのに際して，少し大袈裟に言えば，‘epoch-making’な指針となり得ると判斷して，少々長いが引用して置きたい。

『*George Robert Gissing*（1857～1903）と言う作家の名前を初めて耳にしたのは，丁度，満40年前の秋，学部の2年生の時，当時東京経済大学教授大竹勝先生の「アメリカ文学史」の講義の中でであった。そろそろ卒業論文の準備に取り掛かろうとして居た時期で，主に*O. Henry*に興味を抱き，5，6篇の短篇を読んで居たのである。講義が終わった後，大竹教授に相談に赴いたところ，何故*O. Henry*かと問われて，彼の*ironical*で*wit*に満ちた短編技法に自らの東京生まれの東京育ち特有の洒落気が*match*して居るのでと答えると，それなら英国にも*O. Henry*に匹敵する技巧的な短篇を得意とする作家が居ると言って紹介されたのが*George Gissing*その人であった。早速，彼の短篇集*The House of Cobwebs*（1906）を図書館から借り出して読んで行くと，*O. Henry*とは一味違った，所謂，「人間嗅い」人物達が多数描出されて居て，一気に魅せられて了ったのであった。次の短篇集*Victims of Circumstance*（1927，何と気の利いた*title*かと当時驚嘆したことを今も憶えて居るのだが）を読む内に，その巻頭の解説に*Gissing*の本領は短篇小説に非ずして20篇以上の長編小説に在ると知って，直ちに前期末の傑作*New Glub Street*（1891，実はこれも大分後になって知ったことなのだが）に取り付いて，結局，これが学部の卒業論文となり，続いて大学院に進んでからは処女作から系統的に読み始めたのである。当時の主任教授は大和資雄博士であったが，「小英文学史」（角川書店）の著者としてのその博覧強記

振りに恐れをなして，*George Eliot* 研究の古谷専三博士の指導を受けて，副手・助手の６年間 *Gissing* に埋没したのであった。古谷教授の持論は，一人の作家の研究に当たっては，その全作品はもとより，書簡・日記の類迄すべて読破すべきで，然も，一字一句ゆるがせにせず，充分に時間を掛けて作家の真髄に迫るべしと言うもので，御自身の博士論文も難解で有名な *George Eliot* の全作品を克明に読破しての，約 700 頁に亘る英文による緻密な労作であった。今尚想い出すその緻密振りの一例として，*George Eliot* の代表作と謂われる長篇の，主人公を初め重要な人物すべてに関して，その人名を固有名詞で作家が書いた場合と代名詞で表した時との *nuance* の相違を，*context* に沿って何千回もの例を挙げて論じられたことであった。「作品を完全に読み解くことこそ文学研究の王道である」との信念に従って，我々若輩の助手・副手連中を読書会等で鍛えて下さったことが，その後，半世紀近くもの間，弟子達の研究方法に浸透して居るのである。

武蔵野女子大学に移った二十代の終わりの頃御指導頂いたのが，*Shakespeare* 研究で高名な本多顕彰博士と，アメリカ文学全般特に *Walt Whitman* の研究者として知られた吉武好孝博士であった。この御二人はすべての点で対照的な方々で，禁欲的な本多教授に較べて，生活 *enjoy* 派の吉武教授の方が近付き易かった故もあって，研究は楽しくやらなければ続かないと言う哲学を教えこまれたのであった。昭和 51 年 *Gissing* の長篇８篇と，初めての海外留学で調査した作家の *England*・*France*・*Italy* での足跡をその文筆活動の経過に沿って辿った論文２篇を加えて，「ギッシング研究序説」（桐原書店）として上梓し，続いて，昭和 62 年作家の中期と後期前半の９作品の実証的研究を「続ギッシング研究序説」（㈱ディグ）として出版した直後，実証研究の師古谷専三先生と，私事ながら母を失ったことは，未だ記憶に新しい事実である。その後平成３年に札幌の静修女子大学人文・社会学部創設に参画し，平成９年３月学部長として才１回生を送り出した処で，縁あって札幌大学文化学部に奉職したのであるが，その間には *Gissing* の小説技法を克明に追求する論文を逐年的に発表し続け，その内の 11 篇の論文を幸運にも札幌大学出版助成制度の助けを借りて，平成 10 年春に刊行の運びとなったのである。その末尾の論文こそが，これからの自分自身の研究の方向転換の *stepping stone* たるべき *feminism* の研究の才１作目で，１年半程前に文化学部創設に当って初代学部長を引き受けられた山口昌男先生に御眼に掛かり，40 年に亘って営々と積み重ねて来た一作家の実証研究と言う方法が，現在では通用せず，先生年来の *slogan* である「比較文化」との接点を見出すことこそが急務であることを知らされて，年来の研究を踏まえて方向転換をするための *theme* として，先ず，才 19 世紀後半の英国の「女性解放」の問題に着目し，弟妹の教育に熱心だった *Gissing* が「教育なくして女性の解放はあり得ない」と断言した点に注目して，２人の妹達の教育の実際

的な方法の確認から始めて，同時代の婦女子の解放問題に徐々に手を伸ばし，併せて，彼の作品に出現する，所謂，“*emancipated women*”との関連も洗い出して，一方では，残された２篇の長篇と *Italy* と *Greece* への紀行文の実証研究を続けて自分なりの全作品の完読と言う目標に向けて進みながら，同時に *feminism* の問題へと研究の幅を拡げて行くことを決意して居るのである。』

研究歴の始まりは，大凡，半世紀程前の昭和參拾貳年に遡る。引用文にも在る通り，正確に言えば，初めて George Gissing の短篇小説集に取り付いてから，研究の芽が吹いた事になる。*The House of Cobwebs*（1906 死後出版）と *A Victims of Circumstances*（1927 同）の諸短篇については，其の後大學院生・副手時代に研究とは程遠い report の形で發表した。そして，學部及び大學院に於いて，卒業論文及び修士論文として取り組んだ *New Grub Street*（1891）の完成版を日本大學英文學會「論叢」(vol. 9) 古谷専三博士喜壽記念號に投稿したのが四拾有餘年前の昭和 40 年と言う事になる。勿論，若年特有の意氣込みのみが先行して，僅か代表作一篇を精讀した丈で，烏滸がましくも Gissing 研究の緒に就いたと自負する血氣盛んな時代が，今にして想えば，實に，懐かしい限りである。昭和参拾年代には，神田の古書店街を渉獵しても，Gissing の長篇小説は殆ど見付からず，その正確で簡潔な文體故に昭和初頭から入學試驗問題に最適と考えられ，故に隨筆集 *The Private Papers of Henry Ryecroft*（1903 出版）を中心とした極く僅かな短篇小説のみが存在すると言う狀態であったのである。然しその様な狀況下で，倖いにも World Classics の中に *New Grub Street* が採録されて在る事が判明し，可成の長い時間を費やして，漸く入手したのであった。AMS Press で主要作品約拾數篇が復刻され，順次出版が始まったのは，彼此貳拾年後の事である。*New Grub Street* を落手したのと略同時期に，此れ又當時唯一の批評書である Frank Swinnerton の *George Gissing, A Critical Study* に出會い，同時代の critic に依る辛辣な criticism に一驚させられた事を鮮明に記憶して居る。殆んど粗捜しに終始する作品論に接して，生來の天邪鬼な性格が頭を擡げて，それではこの作品の長所は何處に存在するのかと言う大前提の下に，精讀に取り組んだのである。結論から先に擧げれば，作家は此の作品に於いて，自己の信念を曲げる事を能しとせず，營々と目的に向って進み續ける type の人間と，天賦の才能を生かして飽く迄も功利的に行動する種類の，全く正反對の人物とを對極に置いて，その人生觀の功罪を只管讀者の判斷に委ねると言う手法を取って居て，前者の典型が三文文士 Edwin Reardon であり，後者の其れは Jasper Milvain と Amy Reardon である。更に，作品に幅を持たせ且つ餘りにも直線的な兩端を中和させる手段として，努力を重ね乍らも成功せず，然し何とか俗界の榮光を手にしようと蹠く老

作家 Alfred Yule と，その良き理解者たらんと努める娘 Marian Yule を配して，厚みを狙って居るのである。そして，結末は，貳拾世紀を目前に控えた新時代の波に乗って，富と名聲と美しい妻迄も我が物として勝ち誇る Jasper Milvain の，然し心底深くに息衝く intelligence の持主特有の自嘲の念を抱かざるを得ない自己矛盾を cynical に描き出す事に依って，この作家の主張を明確に打ち出して居るのである。偶然と言っても差支えない形で最初に取り付いた *New Grub Street* の，筆者の其の後の Gissing 研究に與えた影響は，誠に多大で計り知れぬものがあるが，特に他の作品群の中でも屢々活用される前述の「二極對立方式」（と勝手に命名して居るのだが）が，この作家の本質と複雑に絡み合って，此の作家研究の中核をなすであろう事を幽か乍ら察知出來た點と言えよう。尚，敢えて蛇足を附け加えるならば，拙論「*New Grub Street* の人物構成」の完成から四年後の昭和 44 年９月に，土井治共立女子大學教授（當時）に依って *New Grub Street* の本邦初譯が東京の北澤書店から上梓され，其れ迄顧り見られなかった Gissing の長篇小說の存在が俄かに脚光を浴び始めた事と，拙論に附した拾數箇所に亘る引用文の試譯が前者に先行して居た點を，記念として記して置きたい。

作品の研究を續けるに當って，此の作家自身の biographical career に興味を抱いて，依然として僅かしか存在しない資料から，謂わば類推も加えて纏めたのが George Gissing 研究——結婚とその文學への影響（I）（II）である。

> Most writers are to a certain egotistical. They have to be. Gissing was completely egotistical. How else could he have put everything else aside in order to write and publish a book a year through his working life? The single-mindedness with which he pursued his main course is both impressive and rather frightening. The body of work he produced by the age of forty-six is impressive; the sacrifices he was prepared to make for the sake of his work frightening. *He sacrificed both his private and his public, professional life, both his wives and his publishers,* so much so that he seemed insensitive to other people and uncompromising in his rejection of them, and at the same time foolish in that he denied himself the help that other writers have had and that he needed. On the other hand, he was probably more and more sinned against than sinning. *It is not unreasonable for a man to expect fair treatment from a wife or a publisher.* If things go badly in one part of his life, there will be compensations in the other. *Gissing was badly treated by two wives and two publishers.* In a short life, he had more than his fair share of ill fortune, the serious and long illness which led to his death

robbing him of the chance to enjoy even the slow growth of his reputation as a writer. He experienced few of the pleasures of uninhibited friendship and never saw one of his books received with complete enthusiasm. When he died abroad in 1903, few people aware of the extent and nature of his work or of the difficulties he had had to overcome.

(Michael Collie : George Gissing : a Bibliography, p. 7　Italics は筆者)

Canada の Toronto 大學教授 Michael Collie 氏の謂う 'two wives' の一人は，Helen Harrison (通稱 Nell) である。娼婦を生業として居た彼女に，寂寥の慰安を求めた Gissing が，Manchester の Owens College から scholarship を得て將來 Greek 及び Latin 研究を夢見て進學した London University の locker room から他人の金を盗む要因となったのは，一重に彼女を苦界から救出しようとの 'single-minded' な思惑から生じた災難であったのである。參拾日間の投獄の後，London に居辛くなって America に逃避し，貳年後に歸國して Nell と再會，正式に結婚したのは 1875 年作家貳拾八歳の秋であったと謂われる。妻となった後も，益々強まる飲酒癖と，酒を買う金に不自由すれば，平然と以前の職業に立ち戻る妻の夫に與えた精神的苦衷は想像に餘りあるものであったに違いない。塗炭の苦しみの中で，tutoring 等に精を出して，最少限生活に必要な収入を得て居た作家に取っての唯一の樂しみは讀書であったらしい。數年の苦しみから解放されたのは，Helen の alchol 過飲に依る突然の死去に依るもので，此の類稀な惡女との凄慘な經驗に懲りて，次の結婚は愼重の上にも愼重を極めるべきであった筈なのに，何と二度目の結婚生活も，結果として，前回の其れに勝るとも劣らぬ悲劇を産んで了うのである。貧しい shoemaker の娘 Edith Underwood と出會ったのは，作家が當時執筆して居た作品の進捗狀況に行き詰まり，氣晴らしに出た London の街中で偶然に立ち寄った酒場での事であった。再び精神的な慰安を求めて，直ちに結婚した直後の數年は，子供にも恵まれて，先づは平穏であったらしいのだが，或る時期を境に，妻は精神に異常を來す兆候を見せ始め，時の經過につれて狂氣の症狀が顕著に現われ，結婚生活は破綻へと突き進んで行くのであった。

流石に二度の失敗に懲りた Gissing は，その頃漸く定まり始めた作家としての聲價を自覺し，自らの結婚生活の度重なる失敗の直接の要因は，妻となる女性の無知故と '*egotistical*' に判斷して，女性に對して愼重に對處する事を決意した後に，自作の佛蘭西語譯の許可を求めて來訪した佛人女性 Gabriel Fleury の intelligence に魅惑されて，遂に，三度目の結婚へと進むのである。然し，知性溢れる Gabriel には，未亡人の母が在り，英國風の生活に全く馴染もうとせず，飽く迄も母國での暮らしを熱望した爲に，孝心厚い一人娘は佛蘭西に戻る決心を固め，其の強い說得に抗し切れずに，作家自身も子供や弟妹と離れて，海峽を渡ったの

である。然し，毎日の食事や日常生活上の種々の細々とした仕來りの相違に迎合し切れない作家は，遂に，この結婚に於いても安穩を得られず，1903年12月28日異國の土となるのである。*'egotistical'* である反面に於いて，自己を主張し切れない *'weak-minded'* な一面を併せ持つ男性の不幸な一生は，其の作家としての營みにも當然強い影響を及ぼしたのは明白な事實で，其の長篇小說の多くに其の影を認める事が可能である。

New Grub Street の創作技法の特徵として注目した「二極對立方式」を，更に徹底させて見せたのが，翌1892年に執筆した *The Odd Women* である。この作品の主題は，Monica Madden と Rhoda Nunn の二人の heroine を對極に置き，各々前者には Edmund Widdowson との，そして，後者には Everard Barfoot との關係を通して，Monica の無知が原因となる輕率さ，Rhoda の聰明故の愼重さを浮彫りにしようとする點にあり，この theme は，前々作 *The Emancipated* の Cecily Doran と Miriam Baske の其れと同工異曲と言えよう。筆者の永年の研究主題であるこの作家についての發達史的觀點から見ると，Cecily と Miriam の餘りにも直線的な對比の技法を稍修正し，Monica と Rhoda に人間臭い jealousy と言う感情を注入すると共に，Cecily には缺けて居た Monica の自らの行動の愚かさへの反省と，自己の信念に或る程度迄忠實に從うと言う意志の強さを具備させて，人物創造技法に進歩を見せて居る點に，この作家の努力を讀み取る事が出來よう。

> "Oh, if you could give me some of your strength! I have never been able to look at life as you do. I should never have married him if I hadn't been tempted by the thought of living easily — and I feared so — that I might always be alone —. *My sisters are miserable; it ternified me to think of struggling on through life as they do.*"
>
> (*The Odd Women*, Vol. III, p.p. 270～271　Italics は筆者)

> "I left my husband because it was hateful to me to be with a man whom I had lost trace of affection. In keeping away from him I am acting honestly."
>
> (*Ibid.*, Vol. III, p. 249)

Italics で示した部分即ち Monica の五人の姉達の中の健在の二人の年長者 Alice の十九歲の時點と三拾五歲の其れとを比較した描寫にも，作家の筆力の前々作からの發達の證據が顯著に見られる樣である。

Alice Madden, aged nineteen, a plain, shy, gentle-mannered girl, short of statue, and movement something less than graceful, wore a pleased look as she glanced at her father's face and then turned her eyes across the blue channel to the Welish hills.

(*Ibid.*, Vol. I, p. 1)

The elder (now five-and-thirty) tended to corpulence, the result of sedentary life; she had round shoulders and very short legs. Her face would not have been disagreeable but for its spilt complexion; the homely features, if health had but rounded and coloured them, would have expressed pleasantly enough the gentleness and sincerity of her character . . . . Scarcely less shy than in girlhood, she walked with a quick, ungainly movement as if seeking to escape from someone, her head bent forward.

(*Ibid.*, Vol. I, p.p. 24～25)

五歳の Monica が貳拾壹歳に成長する迄の拾六年の歳月が，初々しかった Alice の容姿振舞を斯様に激變させた原因は，其の日暮らしがやっとの低収入と無知故に恵まれた伴侶に出逢えなかった爲と考えると，

"I can't part from you this evening without a word of hope to remember. You know that I want you to be my wife. Will you tell me if there is anything I can say or do to make your concent possible? — WIll you allow me to meet some friend of yours whom you trust?"

(*Ibid.*, Vol. I, p. 209)

と言い寄る二回りも年長の中年男を無下に拒絶する勇氣が湧かなかったのであろう。

一方の極に位置する Rhoda Nunn の生き様は，*The Emancipated* の Miriam Baske を遙かに凌ぐ徹底したものである。自らも typewriting 等の技術を體得し結婚即ち男性に隷属すること無く，完全に自立して居る Rhoda に取って，自立の手助けをして居る Mary Barfoot から，Bella Royston なる友人の若い女性が妻ある男に唆かされて自分の許を飛び出して行ったのだが，欺された事に氣付いて，再び Mary と同居したいと訴えて來て居ると聞いた時，知性ある女性を育成する事こそ自分達の使命なのだから墮落した女性の更生を引き受ける必要は全く無いと毅然たる態度で撥ねつける様にと忠告する事こそ，信念に

生きる強くて新らしい女性として當然と自負して居るのである。

She had a clear, though pale skin, a vigorous frame, a brisk movement — all the signs of fairly good health. Whether or not she could be called a comely woman, might have furnished matter for male discussion; the prevailing voice of her own sex would have denied her charm of features. At first view the countenance seemed masculine, it expression somewhat aggressive, — eyes shrewdly observant and lips consciously impregnable. But connoisseur delayed his verdict. It was a face that invited, that compelled, study. Self-confidence, intellectual keenness, a bright humour, frank courage, were traits legible enough; and when the lips parted to show their warmth; their fulness, when the eyelids dropped a little in meditation, one became aware of a suggestiveness directed not solely to the intellect, of something like an unfamiliar sexual type, remote indeed from the voluptuous, but hinting a possibility of subtle feminine forces that might be released by circumstance. She wore a black serge gown, with white collar and cuffs; her thick hair rippled low upon each side of the forehead, and behind was gathered into two loose vertical coils; in shadow the hue seemed black, but when illumined it was seen to be the darkest, warmest brown.

(*Ibid.*, Vol. I, p.p. 55～56)

乙張りのある容姿と凜とした態度は，勿論，「二極對立方式」の一方の極としての効果は充分過ぎる程上げて居る事は言う迄も無いが，少々視點を變えて見ると，此の人物創造は，執筆當時惱まされて居た二度目の妻 Edith の狂亂振りに對する不平不滿が，理想の女性像を夢想すると言う個人的鬱憤の末の産物では無いかと考えたくなるのである。近年 Feminism の觀點から，Gissing の數多い作品の中から *The Odd Women* 丈が，英國第拾九世紀後半に於ける自立する女性の嚆矢として持囃されて居るが，此の作品を執筆した際の作家の胸中には，極めて個人的な鬱屈したものが充滿して居り，それが人物創造の一技法として表われたと見る方が，永年の Gissing 研究者に取っては，natural であろう。

AMS PRESS の復刻版で約壹阡頁に垂んとする大部の處女作 *Workers in the Dawn*（1880 年 Messers, Remington & Co. から自費出版）について，作家の友人 Frederick Harrison の妻が，1）There is enough stuff in the book to make six novels.　2）The finer type of London workman has never been so truely drawn.　3）Where are the "Workers in the Dawn"? と，極めて素朴な感想を述べたと謂われる通り，作家の第一作は，その溢れんば

かりの意欲が災いして，徒らに多數の人物を登場させ，其れ等の些細な episode 迄欲張って詰め込み，故に焦點の定まらない統制を缺く作品となって了ったのだが，一方，作家の自傳的要素の濃い部分の中から，特に，少年期から青年期への過渡的な時期に於ける作家の分身である主人公 Arthur Golding の「女性觀」に spot を當てて見ると，以後拾數年の間に執筆された諸長篇小說に現われる theme の將に原型とも言える人物創造が確認出來て興味深い。Harrison 夫人の謂う "The finer type of *London Workman*"（Italics は筆者）を，"The finer type of *London Women*" と置き換えて觀察すると，此の realism を信奉する作家の永い間追求し續けた女性像の源泉を探り當てる事になりそうである。

拾歲頃の Arthur の所謂初戀の對象としての八百屋の末娘 Lizzie Clinkersales への慕情を見てみよう。

> Lizzie was a very pretty little girl, and the sight of her pleased Arthur; once or twice he said to himself that she looked like Helen Norman, though in reality she was very different. As he stood in the doorway of the shop he could see her coming over sofar at the end of the street, for her blue dress made her conspicuous. Often she would be holding her slate up in one hand, making out a sum as she walked; or else she would have her slate and her bag slung over one arm and be reading a lesson-book; for Lizzie was pre-eminently industrious and made excellent use of opportunities her hard-working mother gave her. If Arthur happened to be away on an errand at such times he would fret and feel annoyed, often running back at a breakneck speed to be in time for the child's return.
>
> (*Workers in the Dawn*, Vol. I, p. 138)

如何にも子供らしい素直な觀察力である。對する Arthur が Niagara 瀑布に投身自殺する際に 'Helen, Helen!' と連呼した終生の理想の女性像である Helen Norman の描寫には，Arthur の成長した大人の眼差しが認められる。

> For Helen Norman was wonderfully beautiful child, and seemed to bear promise of a womanhood fertile in all perfection of female loveliness. By her eleventh year the light gold of her many curls had deepened to a rich chesnut hue, the face had developed to a perfect oval, the nose had become Grecian in type and of exquisite delicacy, the lips and chin were adapting themselves to an expression at once infinitely sweet, and

indicating a character far above the more distinctly female feebleness in energy and decision. She was already tall for her age, and gave promise of a figure little less than stately; her walk was upright, her step at once light and firm, her face ever looking upwards. Her fingers, already skilled either to hold the needle, direct the pencil, or touch the keys, were models of fairy delicacy: the flowers which she loved to train in the garden were scarcely more beautiful, they seemed to rivive always, instead of drooping beneath her touch.

(*Ibid.*, Vol. I, p.p. 192～193)

同年の Helen は，將に，理想の女神像とでも形容したい程の完璧な美形として描出されて居て，少々氣味が悪い想いすら感じさせるが，加えて Germany に單身留學して知性を磨くと謂う完全無缺な Gissing 自身に取っての憧憬の女性像として設定されて居て，如何にも若年の作家がその第一作に典型的な美女として登場させ勝ちな印象すら抱かせるのである。'But to Lizzie, who was not quite two years older than himself, and whom he had such few chances of observing, he had already erected in his young heart a temple for *far-off worship* — worship as pure as that of the vestals who guarded the undying flame.' (*Ibid.*, Vol. I, p. 142　Italics は筆者）と言う naive な表現の方により現實味を感ずるのは僻目であろうか。注目したいのは Arthur Golding の抱く 'far-off worship' と言う感情で，此れこそ，此の作家自身の女性に對する終生變る事の無かった inferiority complex そのものであり，其の作品の隨處に見られる魔物なのである。Arthur の生涯を狂わす原因となる Carrie Mitchell に對する此の感情に注目して見よう。

She was very pretty, if not positively handsome, tall with dark hair which she arranged in a tasteful way, and dressed in black which seemed to indicate mourning. Though her beauty was of *a somewhat sensual type*, and her features betrayed *no special intelligence* or good-humour, Arthur felt strangely attracted to her for all that. To a beautiful female face he was always especially susceptible, and in this case the natural ardour of his years was additionally excited by the occasional and brief glimpses he obtained of her, and by the fact that she resided under the same roof as himself.

(*Ibid.*, Vol. II, p. 267　Italics はいずれも筆者)

此の引用文は，Carrie に對する Arthur の率直な心情を明確に表わす重要なもので，

'intelligence' には程遠いものの，'sensual' な部分では魅力充分な女性の姿に，若く情熱的な年頃の男性が惹かれるのは當然であり，然も，其の女性は，同じ下宿に起居して居るとあっては，將に，打って付けの狀況と言わざるを得まい。故郷を離れて，London の大學で，一人寂寥と戰い乍ら佗しい學生生活を送って居た Gissing が，出逢うのに何の手間も掛からない路上で春を鬻ぐ sensual な Helen Harrison に若い情熱を傾注した事實其の儘の展開と言って宜しかろう。處女作に自らの體驗を生の形で取り込むのは，些か直線的過ぎる嫌い無きにしも非ずだが，將來を屬望される若者が，一時の氣紛れから，其の進路を大きく踏み外したと言う其の實體驗の real な再現として考えれば，此の作家が是非書き留めて置きたいものとして許容せざるを得まい。男に捨てられ，姙娠した哀れな女性が，貧困故に下宿代に事缺き，家主から立退きを迫まられる狀況を眼のあたりにして，'Pity is akin to love' の諺通りに，此の女性の救濟こそが自らに課せられた使命とばかりに，近くの別の下宿に住わせるのである。然し，Carrie は，Arthur の意志を無視して，女友達と眞夜中迄遊び歩く始末に，救濟の一念から，正式な結婚届を提出し，讀書の習慣を強要する Arthur の姿は，將に，'natural timidity' のなせる技とは言うものの哀れでさえある。愛するとは敬う事と說く夫に，元々遊びで交際した男性の子供を身籠った丈で，愛情の破片も無かったし，貴方に對しても同じと言い放つ妻は，間も無く，酒に溺れる様になり，遂には，街中で男に聲を掛け，呑み代を稼ぐ有様に，業を煮やした夫が，強制的に外出を禁止して仕事に出掛けた間に，妻は家出して了う。孤獨の中で，寂寥を療す手段も見付からず，加えて，心の支えの一つであった Helen Norman から絶縁を告げられた事も在って，絶望の極に達した Arthur は，一年後，その Helen の病死の報が引き銃となって，入水自殺して了うのである。natural timidity と inferiority complex の絢交に苦しんだ主人公の姿は，此の後の諸長篇にも，屢々，顔を見せる事になるのである。

by-plot として興味深いのは，Polly Hemp と Gilbert Gresham の存在である。前述の様に，以降の著作に絶えず姿を現わす人物像の原型が，此の第一作に凝集して居るのだが，Polly Hemp が惡計の限りを盡して Carrie Mitchell を墮地獄に落す様は，後 *Demos*（1886）から *The Whirlpool*（1897）迄の諸作品に於ける plot-making の重要な要素となる 'rascal'（惡人・惡漢）の先駆として注目すべき character として設定されて居るのに對し，Gilbert Gresham は，第八作 *The Emancipated*（1890）の Ross Mallard と共に，作家が理想とする女性の成長の supporters としての役割を賦與された 'gentleman' として登場する。

> At times he was driven into paroxysms of rage when he thought of the mean acts he had committed, the perpetual torture from which he suffered, all in consequence of

this ill-advised but in voluntary passion. He mocked at himself, he attacked himself with the fiercest sarcasms and ironies; a thousand times he went to bed at night saying that in the morning he would rise calm and indifferent to the whole race of womankind, as he had been but a few months ago. And yet the morning found the invincible worm eating still deeper into his heart. He was beginning to dispise himself as a coward, a creature devoid alike of honour and of courage.

(*Ibid.*, Vol. II, p.p. 242～243)

The glance let him to observe Miriam's gait; its grace and refinement gave him a sudden sensation of keen pleasure. He thought, without wishing to do so, of cecily; he matchless, maidenly charm in movement was something of another kind. Mrs. Baske trod the common earth, yet with, it seemed to him, a dignity that distinguished her from ordinary women.

(*The Emancipated*, Vol. III, p.p. 34～35)

然し，二人の画家は，各々，教育と指導の途次に，前者は Helen を，後者は Miriam を，心ならずも愛して了い，自分達に課せられた任務との gap に苦悩すると言う，成熟した男性達の心の揺れを表現する characters として存在するのである。

獨逸人の親友 Eduard Bertz への書簡の中で，'*Born in Exile* was a book I *had* to write' と記した様に，其れ迄の拾篇の長篇小説の中の，所謂，'Gissing men' と稱される Arthur Golding (*Workers in the Dawn* (1880)), Richard Mutimer (*Demos* (1886)), Sidney Kirkwood (*The Nether World* (1889)), Edwin Reardon (*New Grub Street* (1891)) 等，貧困と不運に付き纏われ乍ら苦闘する人物達の集大成として，Godwin Peak を創造し，'Peak is myself — one phase of myself.' と斷言して，'I was born in exile — born in exile.' 'Dead, too, in exile! Poor old fellow!' と此の作品の theme を明示して居るのである。

'I have no other ambition in life — no other! Think the confession as ridiculous as you like; my one supreme desire is to marry a perfectly refined woman. Put it in the correct terms: I am a plebeian, and I am at marrying a lady.'

(*Born in Exile*, Vol. I, p. 223)

と，Godwin Peak が決意を述べる scene が在るが，現實的には，先妻 Nell の死と，現在の妻 Edith との不和に惱み，intelligence からは程遠い女性達との不滿足な生活から，文字通り，‘exile’したいと謂う強烈な願望を抱く主人公の意圖が讀み取れるのである。實際に永年住み馴れた London を捨てて，Devonshire の Exeter へ‘exile’した作家は，前述の決意の實現を夢見て，半歲餘りの異例とも言える speed で，此の第拾壹作目を完成させて居る事實からも，其の意氣込みが窺われよう。

作家の實人生と全く同樣の設定の藥劑師の父 Nicholas の四拾參歲での早逝の故に，其の後の養育を引き受けた叔父と父の友人の宗教家にさせたいとの希望に對し，生來の‘self-assertion’と‘self-esteem’から反撥して，第一の‘exile’が始まる事になる。其して，此れも作家の實人生其の儘に Cambridge Local Examination に合格して，Kingsmill の Whitelaw College へ進學するのだが，此のあたりから，‘vulgar’と‘vulgarity’に對する強度の偏見と嫌惡感が昂じ始め，生來の‘nervous sensibility’と相俟って，以後の悲劇へと落ちて行くのである。特に，「女性」に對する偏見は，將に，常軌を逸するもので，「男性」と同じ「人類」とは看做さないと蔑視するが，一方，實際に女性の前に出ると，‘he behaved with an excessive shyness which was easily mistaken for a surly temper.’（*Ibid.*, Vol. I, p.p. 51～52）と謂う有樣で，「思考」と「行動」とが相反する片跛な性格の持主なのである。第貳の‘exile’は，父の死後，後見人となった‘vulgar’極まりない叔父の Andrew Peak が，何と，突然に College の正門前に‘Peak's Restaurant’の大看板を立てて，食堂經營に乘り出して來た事から，同姓の自分の出自が公にされる恐怖と，折しも行われた學業成績優秀者に對する表彰に當って，science では受賞したものの，最も熱望して居た literature の部門で，普段輕視して居た友人に榮譽を横取りされた shock とが重複して，College を去って，上京する決心をするのである。持って產まれた歪な性質の故に，自分で自分を苦境に追い込んで行く樣は，Gissing の前半生其のものと言えよう。

女性蔑視を標榜しつつも，一方では前述の引用文に在る樣に，‘refined woman’と結婚を目論んで居た Peak は，‘refine’と‘enlighten’を劃然と區別して，

> ‘I hate *emancipated women*! Yes, I hate emancipated women. Women ought neither to be enlightened nor dogmatic. They ought to be *sexual*.’
>
> （*Ibid.*, Vol. I, p. 190　Italics は共に筆者）

と斷言するのだが，作家 Gissing 其の人は，既に *The Emancipated*（1890）を上梓し，實妹達に‘enlighten’の必要性を常々說き續けて來て居る譯で，Godwin こそ作家の投影し

た主人公との極め付けは當らない事を確認して置きたい。

London を捨てて，Exeter に‘exile’した實生活が，この作品でも全く同様に取り入れられて，初め友人宅で Christmas を過す爲丈に訪れた此の地に定住する意志を固めたのは，友人 Warricombe 家の持つ上流階級獨特の落ち着いた雰囲氣と，一家の交際の廣さから産まれる‘female society’の明るい樂しさの外に，Warricombe 家の主人の關心を惹き，その援助に依って上流社會に喰い込みたいと謂う野心が渦巻いて居たからである。敬虔な傳統的キリスト教信者の主人の依頼を受けて，Reuch の Bible und Natur の翻譯を續ける内に，Godwin の内心には，若い頃に自らの意志で拒否した宗教家となる道を，現世功利的に利用しようと言う邪心が生ずる。然し，短期間に餘りにも Warricombe 家に接近し過ぎた Godwin を見て，同家の長男 Buckland は，富裕な一族に特有の猜疑心から，彼が過去に話題の書 *Spiritual Aspects of Evolution* への批判論文 *The New Sophistry* の著者である事實を探り出し，‘hypocrisy’の烙印を押すのである。

> Now, as on the day of his arrival, he was an alien — a lodger. What else had he ever been, since boyhood? A lodger in Kingsmill, a lodger in London, a lodger in Exeter.
>
> (*Ibid.*, Vol. II, p. 199)

第參の‘exile’の地 Bristol での失意の日々の後，漸く氣を取り直した Godwin は，友人に會う事こそ慰安になると考え，London に立ち戻り，親友の journalist John Earwaker から，一般讀者向けの科學解説記事や批評を試して見てはと助言されるのだが，‘We have only one life, and I want to live mine throughout.’（*Ibid.*, Vol. III, p. 167）と，内心に渦巻く成功した友人への嫉妬と羨望の嵐を押し隠した儘，斷わると，次に訪れた Marcella Moxey からの金錢的援助も拒絶して，何の成果も得られずに，Bristol へ引き返すのである。暫くして届いた朗報―― Marcella の兄が Bristol を訪れて，妹 Marcella が荷馬車の暴走に依って落命し，その遺産の一部年八百磅を Godwin に遺贈したいとの遺言を傳えた――に，欣喜雀躍した Godwin は，永年心に秘めて來た Sidwell Warricombe に，清水の舞臺から飛び降りる想いで，求婚の手紙を書くのだが，自分は Warricombe family と謂う‘little world’で生きて行かねばならない，貴男は‘greater world’で活躍して欲しいとの返信を受け取り，歴然とした階級の壁に打ち拉がれて，‘I am an individual merely; I belong to no class, town, family, club.’（*Ibid.*, Vol. III, p. 231）と絶望し，

For my life has been one of slavery and exile, if you know what I mean by it, from the day of my birth.

(*Ibid.*, Vol. III, p. 223)

最後の 'exile' の地 Wien からの Earwaker への最終の書簡には, 'I'll again, and alone. If I die, act for me. Write to Mrs. Peak, Twy bridge.' (*Ibid.*, Vol. III, p. 269) と認められ, 稍同時に届いた Vienna の宿の主人からの昨日英國人が一人客死し直ちに埋葬されたとの新聞の切り抜きと, 請求書の送達先の照會の手紙で, Godwin Peak の, 文字通り, 'the last exile to heaven' が知らされる。'Dead, too, in exile! Poor old fellow!' (*Ibid.*, Vol. III, p. 270) と絶句する Earwaker の姿が印象的である。

Gissing の約貳拾餘年に及ぶ執筆歴を具に檢證して見ると, 興味深い現象に氣が付く。九篇の three volume novel (内第二作 *The Unclassed* (1884) のみ二巻本) を書き上げた後と, 中期に渾身の力を振り絞った參冊の長篇を上梓した後とに, 各々, 中篇小說を手掛けて居ると謂う事實である。精根込めた創作活動の後の一種の息抜きと言って了えば其れ迄だが, 實は, Denzil Quarnier (1892), Eve's Ransom (1895), Sleeping Fires (1895) の參作品には, 各々, 明確な存在理由が在ると考えられる。

The new publishers, Lawrence and Bullen, who publish Roberts's new books, have written to ask me for a novel in one volume. They offer me one shilling on every 6 volume sold, and, what is better, will pay £100 on account, when they publish. These terms are very liberal indeed. Accordingly, I have got to work, and am writing a book called 'The Radical Candidate.' They are highly pleased with the title. The thing will take me about a month more, and will be the length of the ordinary 2-vol. novel, I am writing quickly, and with satisfaction; *I think the book won't be bad*, but it *may* give some offence to the extreme philistine wing.

(*The Letters of George Gissing to Eduard Bertz, 1887-1903,* p. 137　最初の Italics は筆者)

此の新興出版社からの, 其れこそ破格の執筆依頼が, 其れ迄不遇の此の作家を狂氣亂舞させたであろう事は想像に難くないであろう。意慾作に取り組んだ際には, 殆んど例外無く 'best' 作品と自負して來た Gissing の '*the book won't be bad.*' と言う控え目な comment の裏には, 大作執筆の謂わば谷間に當る此の時期に, 今迄の重苦しい雰囲氣に

滿ちた作風を，輕い氣持ちで取り組める今回に於いては，新らしい方向性を持った作風で仕上げて見ようかとの relax した意圖と，六冊に對して一志の印税と言う餌に飛び付く爲には，賣れる本，即ち，讀者が面白いと感ずる作品を書く事こそ至上命題であるとの自覺が存在したと推察される。そして，此の「面白い本」を目指すと言う試みは，實は，後期に顕著に見られる storyteller としての資質を發揮した諸作品の先驅となった事で，storywriter としての本來の天賦の才能に磨きを掛ける効果を齎したと言えよう。

永年の Tory 支配に依って，女性蔑視の風潮が續く地方都市 Polterham を改革しようと目論む Polterham Literary Institute に担がれて，地方選出國會議員候補として，'Woman: Her place in Modern Life' と題する講演を皮切りに，選擧戰に突入するのが，Denzil Quarrier である。

> 'I have known it for thirteen years. You will be so good as to attend to your own affairs, and leave *me* to see to mine! What does a woman care for the interests of the county? Grovelling sex! Perhaps when I am called upon to shoulder a rifle and go forth to die on the field of battle, your dense understanding will begin to perceive what was at stake — Not another syllable! I forbid it! Sit down and serve potatoes!'
>
> (*Denzil Quarrier*, p.p. 175～176)

Jingoism の權化 Lord Beaconfield の強烈な propaganda に激昂した radicalist 達が，常日頃，'Radicalism is a religious itself!' (*Ibid.*, p. 45) と公言する生粋の Tory 黨員の draper Mr. Chown の店を襲擊した直後に，此の吳服商が嘆く妻に對して放った本音である。'grovelling sex' の一言が，當時の地方都市に於ける女性の實態を如實に表わして居ると言えよう。女性解放に必須なのは教育である—— 'What I demand is an education in the true sense of the word.' (*Ibid.*, p. 85) ——と唱えて女性層への浸透を計ろうとする Denzil なのだが，彼には他人に知られたくない祕密が在ったのである。*Workers in the Dawn* の Carrie Mitchell に似た過去を持つ Lillian Allen に惚れ込んだ Denzil は，密かに同棲生活を送って居るのだが，獨身の若手候補として選擧に臨んで居る現在，同棲の事實を公表する譯にも行かず，當選後に正式に結婚するにしても，Lillian の過去の履歷が弊害となると言う，辛い立場に立って居るのである。

> A Pleasant little sitting-room, furnished in the taste of our time; with harmonies and contrasts of subdued colour, with pictures intelligently chosen, with store of graceful

knick-knacks, Lillian's person was in keeping with such a background; her dark gold hair, her pale, pensive, youthful features, her slight figure in its loose raiment, could not have been more suitably displayed. In a room staterier proportions she would have looked *too frail, too young for significance*; out of doors she was seldom seen to advantage; here one recognized her as the presiding spirit in a home fragrant of womanhood. The face, at this moment, was a sad one, but its lines expressed no weak surrender to dolefulness; lips were courageous and her eyes such as brighten readily with joy.

(*Ibid.*, p.p. 1～2　Italics は筆者)

處女作に於ける Carrie Mitchell のと比較して拾有餘年の執筆活動の成果が歴然として居る描寫である。此の Lillian を悲劇的な入水自殺に追い立てる 'rascal' こそ，Denzil が信頼する友人 Eustace Glazzard である。本質的に自分より劣ると見做して居た Denzil が持て囃され，遂には，'Well Done, Quarrier!'，'Quarrier, for ever!' の歡聲に包まれる姿に 'envy' と 'jealousy' の念に驅られた Eustace は，友人の泣き處である内縁の妻 Lillian の過去を暴く事に依って，得意絶頂の友人を破滅に導くと言う悪計を廻らす。曾って不圖した過ちから，Lillian が結婚届迄提出した事の在る Arthur Northway なる下劣な男を探し出し，因果を含めて，Denzil の前に登場させる。思いも寄らぬ此の謀り事に依って，Lillian の神經は異常を來し，失踪した揚句，川邊で遺體となって發見されると言う悲劇の終焉を迎えるのである。Eustace Glazzard の悪計に就いては，'plotting' の系譜の一部として後述する事としたい。選擧と謂う一大 event の進行する中で，若い couple が各々の生き方を摸索する様を，俊敏な場面轉換に依って，vivid に描出した此の作品の効果は，其の後の作家の作風に良い影響を與え，相當な効果を産み出したと斷じて差支えあるまい。

この論考は平成拾七年度札幌大學研究助成（個人研究）に依る成果の一部である。